

【外国人研究者の活躍と支援】

国際的に展開する産総研の研究活動と、そこで活躍する研究者の声をお届けします。

「国境を超えて、交流活発な場をつくる」



インタビュー⑥

バイオメディカル研究部門
首席研究員（つくばセンター）

ワダワ・レヌー（左）

理事

ゆもと のぼる
湯元 昇（右）

国際連携を促す オープンイノベーションハブ

湯元：ライフ・テクノロジーの開発において、産総研はオープンイノベーションハブとしての機能を目指して、さまざまな国際連携に取り組んでいます。たとえば、産総研が開発した最先端技術と相互補完的な技術をもつ、ドイツやフランスなどの海外機関と共同開発を行っています。インドや中国、インドネシアなどのアジア諸国では、日本企業が海外市場に進出する際、現

地の政府機関や研究所とスムーズな連携が取れるような橋渡しのサポートにも注力しています。また、バイオ計測技術や用語、手法の国際標準化を進めるため、アメリカの国立標準技術研究所（NIST）と包括研究協力覚書を結び、研究者の派遣やサミットなどを行っています。

レヌー：私は1990年に初めて日本を訪れ、そのころから産総研との研究にかかわり、2003年には産総研で研究グループ長に就任しました。産総研と優秀な若手研究者が集結するインドのバイオテクノロジー庁（DBT）とは2007年から本格的な交流が始まり、連携して日印相互研究プロジェクトを行っています。2007年から2012年までの間に5回、インドと日本の地で交互にシンポジウムやワークショップを開催しました。2013年には日印共同研究ラボ

「DAILAB」を産総研内に設置し、若手研究者の実験トレーニングなどのさまざまな活動を活発に行っています。

湯元：活動の一つとして、若い研究者を対象としたワークショップを2013年度と2014年度にそれぞれ1週間開催しました。このワークショップでは、産総研の強みである最先端の顕微鏡やスクリーニング技術などを用いた「イメージング技術」のトレーニングに特化することで、若手研究者の育成にとどまらず、日本メーカーの機械や技術の普及にも貢献しています。来日の際の移動や宿泊の支援もすべて産総研が行っています。

社会的慣習もサポートする ダイバーシティ推進室

レヌー：来日から20年以上経った今でこそ日本の環境にも慣れてきました

が、はじめは苦勞することもありました。特に日本の環境でとまどったのは、研究者同士が普段からあまり会話をしないことです。初めての来日から、イギリス、オーストラリアと他国にも拠点を移したことがあります、日本人は言語によらないコミュニケーションに重きを置く分、隣に座っている人同士ですら会話がないうちに驚きました。ただ、それが静かな日本人の良さなのだとは今では思っています。また、産総研の内部でも少しずつ変化があり、2014年度から、ダイバーシティ推進室が外国人研究グループ長らへのサポートを開始しました。そのおかげで、日本語の文章のやり取りをはじめ、言語化されにくい社会的慣習や文化、産総研独自のルールの理解を含めて、言語的な面でサポートしてもらえるようになりました。

湯元：経済成長著しいインドにおいて、近年は科学技術への取り組みも急成長しています。今後は日本やインドの製薬会社と連携し、最先端の研究を医療に役立てていく方針です。2015年度には、産総研内に設置されたDAILABと同様の拠点がインドにもできる予定で、インドのラボへ日本から

も数名赴くことになると思います。そこでもきっとさまざまな文化や慣習の違いを発見することになるでしょう。

交流を促す、カフェのようなラボ環境

レヌー：現在、DAILABでは、インドで4千年以上の歴史をもつ健康術「アーユルヴェーダ」の知識を現代科学に活かすため、抗がん作用があるとされる薬草アシュガワンダの効能やメカニズムなどを調べています。アーユルヴェーダはインド特有のものです、こうした古くから世界に分散している知恵を集約することは非常に意義のある研究だと思っています。そのほか、さまざまな面でのQOL（Quality of Life=生活の質）の向上を目指して、がん細胞や生体細胞を調べる実験も日々行っています。

DAILABのモットーは、楽しく研究に従事することです。研究のアイデアは、机に向かって頭を抱えるよりも、何気ない会話からの方が生まれやすいのです。そのためには研究者同士が一緒にごはんを食べながら、日々顔を合わせて交流を重ねることが一番だと思っています。研究室には日本のほか、インド、中国、韓国からの研究者

が在籍していますが、さらにインターネットを利用した中継で数カ国の大学や研究機関をつないで、「DAILAB-CAFE」を隔月で開催しています。これはDAILAB Classroom for Advanced & Frontier Education の略で、産総研内外の研究者が講師となり、学生向けに英語で研究を語るという教育目的のセミナーとして、お茶を片手に行っています。このほか、英語でのポスター発表会やラボメンバーでのパーティを開催するなど、英語によるインタラクションの機会を作っています。こうした交流の一つ一つが、より良いコラボレーションを生んでいるのです。

今後も外国人研究者を積極的に招くためには、まずバイリンガルの環境を作ることが大きな課題です。国際的なフィールドで勝負するためにも、英語でのプレゼンテーションは必須です。普段から英語でディスカッションを行うことは、日本人研究者にとっても、外国人研究者にとっても有益な機会になるはずです。ここ産総研にはとても豊かな設備やインフラが整っていますから、それらの強みを有効的に活用しながら、お互いが楽しく研究し合える環境を作っていきたいと思っています。



DAILABの実験室



ワダワ・レヌー首席研究員とDAILABのメンバー